

## B R I C s 需要の拡大が食糧危機を招く恐れ

～ 天候条件が改善しても高値圏で推移する穀物価格 ～

2007年 3月13日 (火)

B R I C s 経済研究所 代表 門倉 貴史

E-mail: postbrics@yahoo.co.jp

### ～ 要 旨 ～

主要な穀物の国際価格が高値圏で推移している。2006年は、とりわけ小麦の価格上昇が顕著となり、2006年10月には約10年ぶりの高値となる1ブッシェルあたり5ドル台にまで乗せた(シカゴ相場)。足元では、4ドル台に落ち着いてきているが、依然高値圏であることに変わりはない。

小麦の国際価格が大幅上昇した需要側の要因としては、B R I C sをはじめとする有力新興国で小麦の需要が急増していることがある。これまで、B R I C s は世界の小麦生産の3割を担う主要供給基地であったが、最近では、小麦の生産が国内の需要の増加スピードに追いつかなくなり、国際市場から小麦を調達する動きが強まっているのだ。B R I C s のなかでは、インドの小麦需要の増加が顕著である。急速な経済発展に伴い中産階級が増加傾向にあるインドでは、国民の食生活の西洋化が進んでおり、米食からパン食への変化がみられる。また、インドはもともと甘党が多かったため、ビスケットなど小麦を原料とした甘味需要も増加傾向にある。中国でもインドと同様に国民のパン食化が進んでおり、小麦の需要が増えている。

有力新興国の小麦需要が趨勢として増加するなか、世界の小麦生産量に占めるB R I C s の消費の割合は急激に高まりつつある。1970年の段階では20.1%であったが、年々上昇を続けて80年に24.2%、90年に28.1%となり、直近の2005年は36.0%に達した。このまま、B R I C s をはじめとする有力新興国の高成長が続けば、小麦の需要はさらに増加を続けていくことになるだろう。

小麦について、世界生産に占めるB R I C s のシェアが将来どの程度まで上昇するかをシミュレーションすると、B R I C s の小麦消費量の世界シェアは、2005年時点では36.0%であったが、2010年には37.6%、2020年には40.5%、2030年には42.7%へと上昇する見込みである。

トウモロコシや大豆など、そのほかの穀物価格も上昇しているが、これらもB R I C s での需要が増えたことが、価格上昇の主要因となっている。大豆やトウモロコシといった穀物需要の拡大は、食生活の肉食化と密接な関係がある。B R I C s 域内における食肉需要の高まりによって、直接的な穀物需要の何倍もの飼料用穀物が必要となっているのだ。また、トウモロコシの場合、米国がガソリンの代替エネルギーとして注目されるエタノールの原料に使うトウモロコシの消費を増やしており、これがトウモロコシの世界需給バランスをいっそうタイトなものとしている。

現在の穀物価格の上昇をもたらしている供給側の要因は、天候条件によるもので一時的といえるが、需要側の要因はB R I C s の消費拡大といういわば構造的なものである。このため各種の穀物の価格は、短期のみならず中長期でみても、需給逼迫を背景に上昇傾向で推移する可能性が高い。

**(高値圏で推移する穀物価格)**

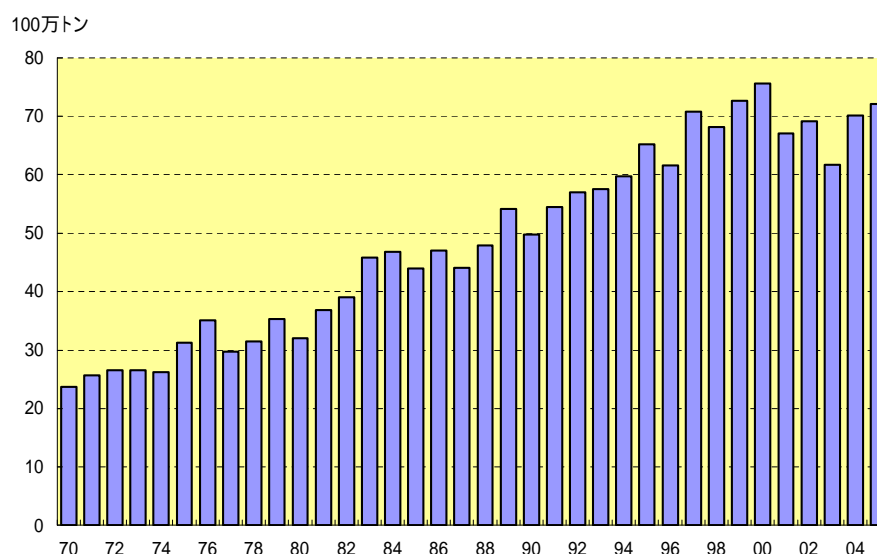
主要な穀物の国際価格が高値圏で推移している。2006 年は、とりわけ小麦の価格上昇が顕著となり、2006 年 10 月には約 10 年ぶりの高値となる 1 ブッシェルあたり 5 ドル台にまで乗せた（シカゴ相場）。足元では、4 ドル台に落ち着いてきているが、依然高値圏であることに変わりはない。

2006 年に小麦の国際価格が大幅上昇した背景には、需給のバランスがタイトになったことがある。供給面についてみると、主要産地の米国やオーストラリアが干ばつに見舞われたほか、フランスをはじめとする欧州でも今夏の熱波の影響で減産となり、世界的に生産が伸び悩んだ。

**(BRICsにおける穀物需要の拡大が影響)**

また、需要側の要因としては、BRICs（ブラジル、ロシア、インド、中国）をはじめとする有力新興国で小麦の需要が急増していることがある。これまで、BRICs は世界の小麦生産の 3 割を担う主要供給基地であったが、最近では、小麦の生産が国内の需要の増加スピードに追いつかなくなり、国際市場から小麦を調達する動きが強まっているのだ。BRICs のなかでは、インドの小麦需要の増加が顕著である（図表 1）。急速な経済発展に伴い中産階級が増加傾向にあるインドでは、国民の食生活の西洋化が進んでおり、米食からパン食への変化がみられる。また、インドはもともと甘党が多かったため、ビスケットなど小麦を原料とした甘味需要も増加傾向にある。

インドでは、2006 年春の不作により国内で消費するのに十分な小麦を確保することができなかった。このため、オーストラリアやロシアなどからの買い付けを増やしている。また、インド政府は小麦の輸入を増やすために、2006 年 9 月 4 日から暫定的に小麦の輸入関税を撤廃しており、これによって海外からの調達量が増えているという側面もある。インドは国内での需要増に対応するため、2007 年中の小麦の輸出を停止する決定をした。

**図表 1 インドの小麦消費量の推移**

(出所) 国際食糧農業機関資料より作成

中国でもインドと同様に国民のパン食化が進んでおり、小麦の需要が増えている。さらに、B R I C s だけではなく、モロッコなどアフリカ諸国でも小麦を海外から調達する動きが出てきた。

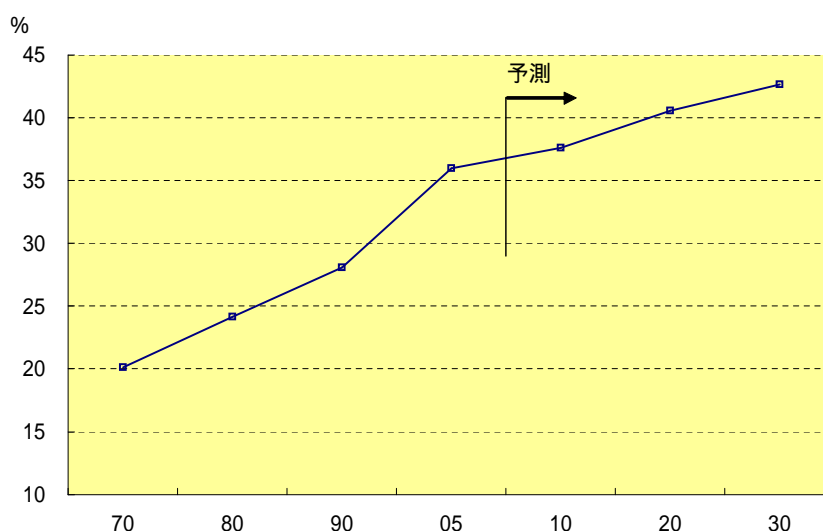
有力新興国の小麦需要が趨勢として増加するなか、世界の小麦生産量に占めるB R I C s の消費の割合は急激に高まりつつある。1970 年の段階では 20.1%であったが、年々上昇を続けて 80 年に 24.2%、90 年に 28.1%となり、直近の 2005 年は 36.0%に達した。

このまま、B R I C s をはじめとする有力新興国の高成長が続けば、小麦の需要はさらに増加を続けていくことになる。

そこで、小麦について、世界生産に占めるB R I C s のシェアが将来どの程度まで上昇するかをシミュレーションしてみたい。シミュレーションは以下の要領で行った。まず、世界全体の小麦生産については、過去の世界生産の長期的なトレンドを 2030 年まで先延ばしする。一方、B R I C s の小麦消費については、各国ごとに「生産 + 輸入 - 輸出」をマクロ消費量としてとらえ、これを人口で割って 1 人あたり消費量を算出する。1 人あたり消費量の実績を 1 人あたり所得の実績で推計したうえ、この推計式に 1 人あたり所得の将来予測値（水準が低ければ逓増し水準が高くなると逓減するロジスティック曲線によって算出）を外挿して、将来の 1 人あたり小麦消費量を求める。将来の 1 人あたり消費量に、将来推計人口（国際連合の中位推計）を乗じて各国のマクロの小麦消費量を求めたうえ、これらを合算してB R I C s のマクロ消費量の将来予測値とする。

結果を示した図表 2 によると、B R I C s の小麦消費量（トンベース）の世界シェアは、2005 年時点では 36.0%であったが、2010 年には 37.6%、2020 年には 40.5%、2030 年には 42.7%へと上昇する見込みである。

図表 2 世界生産に占めるB R I C s の消費割合（小麦）



（出所）国際食糧農業機関、各国のGDP統計、国際連合資料などより筆者試算

トウモロコシや大豆など、そのほかの穀物価格も上昇しているが、これらもB R I C sでの需要が増えたことが、価格上昇の主要因となっている。

小麦と同様の方法で将来のB R I s需要を試算すると、大豆の消費量(トンベース)の世界シェアは、2005年時点では39.9%であったが、2030年には52.8%まで上昇するとみられる。また、トウモロコシの消費量(トンベース)のシェアは、2005年時点では28.5%であったが、2030年には51.0%まで上昇する。

大豆やトウモロコシといった穀物需要の拡大は、食生活の肉食化と密接な関係がある。B I R C s域内における食肉需要の高まりによって、直接的な穀物需要の何倍もの飼料用穀物が必要となっているのだ。また、トウモロコシの場合、米国がガソリンの代替エネルギーとして注目されるエタノールの原料に使うトウモロコシの消費を増やしており、これがトウモロコシの世界需給バランスをいっそうタイトなものとしている。

現在の穀物価格の上昇をもたらしている供給側の要因は、天候条件によるもので一時的といえるが、需要側の要因はB R I C sの消費拡大といういわば構造的なものである。

このため各種の穀物の価格は、短期のみならず中長期でみても、需給逼迫を背景に上昇傾向で推移する可能性が高い。